

Valerie Hansen

Changing Gods in Medieval China, 1127—1276

松 本 浩 一

著者のヴァレリー・ハンセン氏は、現在米國イェール大學の準教授として教鞭をとっているが、かつて京都大學に約二年にわたって留學し、竺沙教授のもとで主として中國の民間宗教をテーマに研究をすすめてきた。この著作は、このときの研究をもとに、ペンシルヴァニア大學に提出された博士論文をもとにまとめたもので、南宋時代における廟神に對する人々の信仰の様々な側面、祠廟をめぐる鄉村の社會關係、この時代の廟神信仰における新しい傾向などが分析されている。

まず第一章「序説」では、一般に南宋の時代は(唐宋)變革期の最終段階に位置づけられるとしたあと、それらの變革に對應する宗教界の變化で最も重要なことは民間のパンテオン(popular pantheon)の形成であると述べる。以前であつたら認められなかったような低い階層出自の神々が、國家から廟額や稱號を與えられ、また神々の支配領域ももともとその廟がおかれた地區、即ち廟神のももとの管轄地域を超えてより廣くひろがり、また奇跡をおこす範圍も、雨をふらせ災害や賊から地區を守ることから、商業上のもうけをもたらすというようなものにまで擴大していき、人々はあらゆる助けを

求めて廟におとずれるようになる。まずこの書で扱われる宗教界の變化とは以上のようなものであり、主として史料の存在と、支配領域の安定性ということから、焦點は南宋時代にしぼられることを明らかにしたあと、その背景となるこの時代のさまざまな領域での變革が概観される。即ち當時の人口の狀況から、都市化の進行、二期作の導入、水利技術の發達によって換金作物の栽培や手工業がおこり、貨幣の流通が擴大し市場經濟が成長したこと、そして各地方の商業の中心地を結ぶ交通網(とくに水路による)が發達したことが述べられる。また宋代では科擧が知識人層をひきつけていた反面、北宋末の政争の激化により、一部のエリートは官僚となることより、地元で勢力を扶植することを選ぶようになったことがふれられる。以上の二點は著者の論の上で重要なポイントとなる。「全國的な市場圏の擴大は南中國の人々の交流を促進し、商品ばかりではなく神々も流通するようになった。」と著者は述べている。市場圏の擴大は神々の信仰圏をも擴大したのである。

次の「史料」と題されたセクションでは、主として著者がもつていた史料が紹介される。それに先だつて著者は民間宗教に關する史料についての一般的な問題を提出している。即ちこの時代、整版印刷の普及に伴つて殘された文獻史料の量も飛躍的に増大したが、一般民衆の識字率は極めて低かった。彼らの信仰は道士や僧侶、あるいは地方官などのものとは全く異なっていたが、人々は直接神々に祈ることができたから、彼らには聖職者も經典も必要はなく、人々が神々について學ぶのは全く口頭の傳承によつていた。しかし元來記錄には残りにくいそのような口頭による傳承はどのようにして得られるのか。ここで著者は、幸いにして文人たちが彼らのこのよう

な話を書きとめる機会が存在したとし、そのような例として、廟記と筆記をあげる。そこには一二、一三世紀のあらゆる階層の人々が、危機的状況に直面して神々や宗教者に懇願をなし、それに對して彼らが様々な靈驗をあらわしたことが記述されており、これらが主たる史料となると述べている。「もし神が彼の受けた爵號を見ることができないなら、奇跡を行おうとはしないでらう」というように、廟記は神々自身が讀むことが想定されていたとするが、神々が大きな奇跡を示したとき、あるいは廟が創建、重建されたときに石に刻まれ、神が神となる前の傳記、あらわした數々の靈驗などが記されている。またこれによって信者の直面していた問題を明らかにすることができ、著者が最も多く利用しているのは、地方志に残されたこれら廟記とともに、様々な筆記、中でも特に『夷堅志』である。著者はまず撰者の洪邁の略傳から紹介し、『夷堅志』の性格、記述の際にあつた洪邁の態度、姿勢などを論じる。著者はこの「夷堅」という名の由來や、この書物が聞いたことをそのまま記す態度につらぬかれていたことを述べ、最後に同じ廟の觀音菩薩の靈驗譚を記した『夷堅志』と廟記の記述を比較して、フィクションが入りこみ、また讀者をよるこぼすためのバイアスがかかっていることを考慮しても、洪邁が信頼すべき話者であるとしている。

實際この時代の民間宗教の實態を知るためには、この書物はまことに豊富な史料を提供してくれている。しかし著者もいうように、これがどこまで忠實な當時の民間傳承の記述とみなせるかは問題がある。最初から話のおもしろさによって採っているため、様々な階層の人の話が含まれ、中には宗教者が意圖的に作って廣めたと思われる話もある。更にこの記述が、民間傳承の記録であればある

ほど、それを歴史の史料と同様に扱うことはできない。即ちそれらは民間傳承としての扱いがなされる必要があり注意を要する。

第二章「民衆の選擇」では、この時代の人々が、助けを求めて祈願をなすにあつていかなる神を、あるいはいかなる宗教者を選択したかということが論じられる。この場合に基準となる唯一のものは神々の、あるいは宗教者の「靈」即ち靈驗である。最初の「神々の選擇」と題された部分では、まずはじめに『夷堅志』に記された、洪邁自身の家に靈が出現したときの、家で祀っていた眞武神、佛陀、土地神そして靈神それぞれの對應をめぐり、洪邁の父が、それぞれの神々が異なる傳統（即ち道教、佛教、古代の宗教）からでているにもかかわらず同じように保護を求め、彼らをその力に従って評價していたことを明らかにしている。次に『宣和奉使高麗圖經』により、危険きわまりない大洋の船旅の中で、水夫や乗客たちが、觀音や東海龍王など旅の行程にそったところにあるあらゆる廟の神々に、援助を求めて拜々を行うことを述べる。そして觀音や呂洞賓など佛教、道教に起源をもつ神々も、一二世紀には中國中で民間のパンテオンに存在していたとし、湖州の二つの觀音廟の話为例にあげ、神像の巡行や供宴、雨乞いなど、他の民間の神々に對するのと人々の信仰の形態は全く變わらず、彼らはほとんどの場合人格をもったものとしてとらえられていたとしている。そして孔子が重丘に下つて、彼を祀った廟が荒れはてたことを訴えた話を紹介して、ここでは完全に孔子も民間の神々の一人に變貌していると指摘する。次に宋代になると、以前は神として認められなかったような、低い階層出身で事故や戦い、あるいは病で死んだのち廣い信仰

をあつめる神々があらわれてきたことがとりあげられている。そして反亂軍によって殺された福建順昌の范旺の信仰を例とし、これらの神々の信仰の成立は一般的に次のようなパターンに従うと指摘する。まず死後、死んだ場所の近くでそこには雨が降らないとか、紫の氣がただよふとかの異常なことが生じる。次にそこに廟がたち、それらが靈驗があらたかであるかぎりたちまち信仰を集める。更に范旺の例のように名士の支持を得て額を申請し、地方官もこれを支持するようにするという経過である。

「神々と宗教者の選擇」では、神々の間ばかりではなく、民衆の側には異なった宗教者を選択する必要があったことが述べられる。これらの宗教者には僧侶、道士のほか、風水師、占い師、觀相家、呪醫などがあつた。病氣などの際には人々は自由に彼らのうちの誰かに讀經・儀禮・呪術等を依頼した。新城の縣尉の陳氏が殺人犯を捕えるために、最初に地方神である松溪神と天に祈り、次に道士をおとつて紫姑神の扶乩によるおつげをあおいだ話をあげ、俗人は自由に神々と宗教者を選択することができたとする。「人々は彼らの評判、利用の便宜、そしてコストによって選擇を行った」のである。これに對し、宗教者の側はたとえ文盲の者であってもある一つの傳統に結びついている必要があつた。「正式な教理を學んでいない宗教者は、少なくとも人々に彼らの靈力を納得させるために道教、佛教の儀禮をまねる必要があつた」という。そして多くの神々に祈つて靈驗があつた場合、どの神の靈驗であつたとどのようにして決められるのかという間に對し、著者は「このような決定（どの神が最も靈驗豊かか）は社會的なプロセスの結果であり、これによって個々の神々の信徒は信仰する神々への信頼を増していく」と述

べているが、探求が可能なところで、この社會的プロセスがどのような背景の中でどのように進行するのかが探求されねばなるまい。

この選擇の問題は微妙である。はたしてこの時代、現代の臺灣で僧侶、道士、法師、童乩にみられるような宗教者のすみわけあるいは競合がみられたのだろうか。例えば現在でも不幸が續いた場合、その理由づけは様々であり、死者のたたりとして死者のための儀禮がとりおこなわれたり、あるいは直接改運のための法事が行われたりしている。しかし地域によって、また人間關係によって、助けを必要とするときに誰のところへいくかは、必要とする助けの種類によってある程度決まっている。しばしば『夷堅志』に登場し、著者も引用している一つの宗教者がだめなら次をよんできてという話や、様々な宗教者を一緒に雇ってきたという話も、人々が傳統の區別なく同じように様々な宗教者を受入れたという一面を示すものではあるが、最後に靈力を示した宗教者の宣傳、あるいは話をもりあげるための話型のパターンの一つというところもありうる。實際にどこにあつても、幅廣い選擇の自由があつたというのはかえって考えにくい。その地域に特有の宗教者間のすみわけが存在しており、ある程度選擇は限られていたのではなからうか。

第三章「神々の理解」のテーマは、この章の最初に明確に述べられている。「神々の行動は、宋代を通じてかなり人間になぞらえて説明された。全ての解決の背後にある原則は、人々と神々は相互に依存しているということであり、人々が保護と奇跡を必要とするように、神々も承認と評價を要求する」。人々は夢や自然現象、神託などから神々の行動を解釋した。そこでこの章では『夷堅志』や廟

記に記されたこれらの逸話から、明確にはされていない民間宗教の原理を明らかにすることを試みる」のだという。

しかし著者は、これらの史料にあらわれている神々の力への強い信仰とは対照的な、神々への信仰は常に疑いと共存していたことを示す話を引用することからこの章を始めている。それに續いて紹介しているのは南宋時代の戯曲にみえる話で、その中である土地神は、もともと豊富な捧げ物があれば私もより大きな力を示せるのに、と嘆いている。神々が奇跡をおこす力は人々の捧げ物、即ち人々にどの程度認められているかということによっている。また神々も人間と同じような動機で行動し、やはり面子を失うことを恐れているのだという。しかしここに記されたことは觀察者のあまりにつきはなした見方のようにも思える。これだけでは祭りの日や進香のあの熱狂は説明できない。土地神の話にしても一般の人々の神観を代表するというより、單に政治への批判（それこそ賄賂をあげなくてはならぬ）とも解釋できる。

次の「神々の欲するもの」は「第一部神像」と「第二部祠廟」にわかれてはいるが、ここでは神々が靈驗をあらわし奇跡をおこすために必要とされたものとして、神像と廟宇のことが述べられる。先に述べられた原理により、神々が宿ると信じられた神像とその家にあたる廟宇が貧弱であれば、神々はその力を發揮できないとする。それで要求に應じないとこれらを破壊するというおどしも行われていた例を引く。神像についての部分では、神の姿を正確にうつしていることが重要なポイントの一つと考えられており、著者によれば、この時代に神の肖像に關する様々な傳承がしだいに統一されてくる動きがあったのではないかという。祠廟についての部分では、民間

宗教の祠廟が寺觀などに比べ、所有している土地が格段に少なく、記録の中でも神々がそれらを要求したという話が少ないことを指摘している。これは著者のいうように廟の維持は一般信者の支持に頼っており、寺院などとの性格の違いを示すものであろう。

「神々とのコミュニケーション」では、靈媒を通じての神々との直接的會話、夢の中のおつげ、筭、扶乩、籤などによって神々の意志を知る方法の事例が紹介される。著者によればこれらの例から歸納される一つの原則は、メッセージが明確になるほどそれを受けとる人は少なくなるということである。したがって多くの人々が直接神々に問えるような筭、扶乩、籤などの方法は多様な解釋が許されることになる。筭に關する話では、人々が筭を行ふ際の眞剣さが示され、扶乩の部分ではこの時代まで降ってくる神は紫姑神に限られず、他の神々や死者でさえも行ふようになってきたことが指摘される。そして最後に紹介される新しい籤の由來を語った話では、夢と筭と籤による神のおつげが複雑にからみあい、様々な人によるおつげの解釋の多様性が示される。

「神のおつげの解釋」では改めて上記の方法による神のおつげの解釋が議論される。それは僧侶、道士、廟祝などの専門家のほか知人、友人、親戚などによってなされるが、著者によれば「神と人との相互互惠、極めて人間的なロジック」という點は共通しているという。そして神のおつげが相互に矛盾した場合や、また何人かの神に祈って靈驗があった場合どの神の功とするかという場合など、それらを解決するのはやはり社會的プロセスの結果としてであり、力のあるグループの解決が、後の時代に記録として残されるようになるのだという。

そして最後の「神々の力に對するとらえ方の變化」では、民間宗教はかなり柔軟な性格を備えているから信者の生活に敏感であり、「一二、一三世紀における神々の能力についての理解の變化は、民間宗教の社會經濟的變化に對する敏感な反應をよくあらわしているものではない」として、神々が以前からの病氣なおしや祈雨祈晴、災害からの守護といったことに加え、商業上の活動に關しても、價格變化のアドバースなどの靈驗を示すようになったことをいくつかの例から示し、「市場システムの中へ民衆が入りこむにつれて、神もそこで力を發揮することが求められるようになった」ことを指摘している。

この章でも著者は『夷堅志』からの話を盛んに引用して、論を進めている。しかしここに論じられている事柄、特に神々とのコミュニケーションや神のおつげ、あるいは神々の行爲の解釋といった問題は、宋代だけの問題に限られない。これらは現代の宗教人類學、民俗學などでも探求されている問題である。著者自身、『夷堅志』などから豊富な例をあげているが、やはりこれらの問題を考える資料としては極めて断片的であり、その記事の中にもられている考え方をどこまで普遍的なものとしてとらえることができるかという問題もある。それだけにこれらの問題については、現在の臺灣、香港など、より綿密な調査研究が可能なところでの分析をふまえて考察されるべきであろう。

第四章「賜額賜號」では、宋朝による民間の神々への賜額賜號をめぐる諸問題から考察される。この點に關しては日本でもすでに何人かの考察があるが、著者のように、稱號を申請する側にたつての

社會的背景をさぐった試みは、充分になされているとはいえない。

一一世紀の後半から朝廷より廟額・稱號を得ることが、前節で論じた神への敬意を表現する方法として一般的なものになったが、この方法のみが全ての場合に官僚が關わらねばならないことを指摘する。次に『宋會要輯稿』によって宋代の賜號の數の變遷をグラフにあらわし、一一世紀半ばに擴大した數が南宋を通じてほぼ保たれたという傾向を示したあと、續けて朝廷の賜號に關する法令を年代順にたどっていく。そして最後の部分で「廟が祀典に含まれることが何を意味するのか」という疑問を提出している。著者は祀典に含まれた廟では、地方官が春秋の祭りに参加し、修繕、祭祀の際には費用が支給されることがあったことを指摘する。

「民間信仰の彈壓」の部分では、祀典に入らず淫祀とされた神々に對する彈壓の問題が取上げられるが、著者は政府の政策の中心は祀典外の信仰を彈壓することにはなく、奇跡をおこす力のある神々を承認し、そのことによって、民衆のためにより多くの靈驗を示し續けさせることにあつたのだとする。そして彈壓は宋代を通じてしばしば攻撃的な官僚によって行われたが、散發的であつて、長い效果をもたらしたものはないとする。次に賜號の請求の具體的な手續きについて分析を加え、出された請求に對し、神がそれにふさわしい靈驗を示しているかを、轉運使が二重にチェックしていることを示し、ここまで政府が嚴重だつた理由は、一つには神々の力を伸張させることになる措置に對して慎重になつていたため、一つには地方の有力者たちに壓力をかけられた州縣の地方官（彼らが實際の申請を行う）が、公平になれないことがわかつていたためであろうとしている。著者は一二世紀のころには「政府の賜號のシステムは人

人の考え方の中にしみわたっていたので、神々が自分とはどんな稱號をもっており、この稱號によって自らの力も影響を受けることをはっきり意識している人々は考えていた」と述べ、この考えは稱號を與える側の官僚も共有していたとする。そして地元の有力者のグループが、その地位を擴大する一つの方法は、彼らの奉ずる神にタイトルを要求することだったが、そのためには地方官の協力が必要であった。一方地方官も政治の推進には彼らの協力が不可欠であったため、ここに彼らの間に協力關係が成立する。

續く「宋代の社會階層と廟記」ではこの地元のエリートたちと地方官の關係が、廟記にもとづいて更につつこんで分析され、實際に官職についていた者、低い官位のみをもっていた者、進士の資格をもっていた者、それらを持たない者たちの間に、意識の上で大きな斷絶はないことを指摘する。

先に述べたようにここでは著者はこの朝廷による賜號を、主としてそれを請求する側の事情からとらえようとしており、その點では興味深い面を示し得ている。しかし賜額賜號の政策は、ある面でパントオンの成立と深い關係をもっていると思われる。確かに儒、佛、道に由來する神々が、民間出身の神々と同じレベルでとらえられるようになっていったのは、民間宗教のこの時代の活力がもたらした變革の結果かもしれない。しかしヒエラルキー構造をもったパントオンの形成は、やはり權力者の側の秩序體系確立への試みとしてとらえる必要があるのではなからうか。この點で賜號の制度と稱號を求める側との關係は、科擧とそれに應ずる側との關係にもたとえられよう。賜額賜號の政策の最終的な目的は神々の統制にあったと思われる。そして確かに祀典は全てにひらかれどんな神でも應じ

られたが、實際にはその外に多くの祠廟が存在し、それらはしばしば淫祠とされて彈壓をこうむりつつ、その中で生きのびてきたのであろう。

第五章「湖州の民間神」では、湖州における民間の神々に焦點があてられる。湖州がとりあげられたのは、この地方の地方志が豊富に残されていることと、この地方が西部の丘陵地帯と東部の低濕地という、對照的な條件をもつ二つの地域から成っていて、揚子江デルタ地帯の縮圖とみなせるという理由による。

最初にこの二つの地域の概況が述べられたあと、まず西部の「高地」地域がとりあげられる。この地域がひらけたのは東部よりも早いが、まだ自給自足の經濟にたよる部分が多い。そのため漢あるいはそれ以前に、この地方で偉業を残した英雄たちを祀る廟が多く、廟の創建あるいは重建が六朝から唐代とされているものが多い。ここでは三つの廟が紹介される。武康縣の龍を祀った廟は傳統的な農耕神の典型であり、安吉縣の東獄廟と李靖を祀った廟については、後者は農民に支持された地方神で、靈驗も祈雨祈晴、病氣なおし、災害からの守護等である一方、前者には織物商人がかかわっており、信仰は安吉の人々に限られず他郷の人にもひらかれているなど對照的な面を示している。「低地」は長江デルタの低濕地帯にこの時代にひらかれた地であるが、人口増加と鎮の成長などにみられるように、しだいに中心はこちらへ移るようになった。従ってここには五代から宋にかけて新しく興った廟が多い。この低地にある新興の神々は全て低い階層の出身で、地方の人々のために犧牲となった後神に祀られたという經歷をもつ。これらの信仰が誕生してく

るメカニズムを、當時の各社會層の動きとともに分析したこの部分は極めて興味深い。これ以降の時代におけるこのような動きとともに、今後より詳細な研究がなされるべき部分であらう。

續いて徳清縣のいくつかの廟が紹介される。安吉のものと同じような背景をもつ新市の東嶽廟、すでに農民ばかりでなく商人や地方官も支持するようになっていた新塘の土地神、そして比較的新しい三世紀の將軍を祀ったという新市の永靈廟であるが、その一一四〇年の廟記には資金を據出した人の名が記してあり、やはり地方の有力者、富裕層と地方官が結び附いてこの廟の信仰をバックアップしていたことが分析されている。この事情は南潯の嘉應廟についても同様で、その靈驗譚はこの信仰を支持したのが商人などの富裕層であったことを示している。そして、廟額の獲得に向かわせたのは、一つには神への敬意、一つには地方同志の競合意識であったとする。そして新塘の土地神と永靈廟の神の靈驗譚が極めて似かよっていることから、同じ奇跡を自分たちの神のものとする競合も存在していたことを指摘する。またこのような競合は同じ地區の中においてもみられ、一二七五年の薦福祠の偽の賜號の記事から、この信仰は朱一族が勢力を扶植するために廟記を全く嘉應廟にまねて作り、信仰を起こそうとしたもので、結局は民衆の支持を得られず一族の神としてのみ存続したという例を紹介している。

そして「結論」では、上記の例のようにこの時代に新しい信仰を組織しようとした運動があり、地方神の信仰が決してその地區全體をおおうようなものではなかったことを示している。それらの動きをすすめたのは影響力、支配力、財力をもった有力者であったが、決して彼らがヘゲモニーをもっていたわけではなく、一般の支

持が得られない、即ち神に奇跡を起す力がないと信仰は支持者だけの範圍内に收まってしまう。そしてこれらのほかにもより力のない者たちが支援した信仰も存在していたことを指摘している。

第六章「地方神の誕生」では、もともとその神が祀られていた地域を超えて、より廣い地方で信仰される神々が生まれたことを論じている。著者によれば、一二、一三世紀には、ある特定の地域だけで信仰され靈驗をあらわす多くの神々と、このような神々の信仰とが共存するようになってくる。著者も引用している『左傳』にみられるように、他の地域の神は祀らないというのが傳統的な考え方であったから、この傾向は當然保守的な人々の非難をまねき、論争をひきおこした。ここでは主としてそのような神々の典型として、宋末には南中國一帯で祀られるようになっていた四人の神々、即ち徽州起源の五顯神、四川起源で文昌帝君の前身である梓童帝君、福建の莆田出身の海の女神で現在でも廣く信仰されている媽祖、そして湖州廣德軍の牛祭で有名な張王の信仰が分析される。

まず「神々の管轄領域に關する傳統的な見解」では、最初に、神もその支配領域をもっていてそれを越えてはならず、また靈驗もあらわすことができないと考えられていたことを示す。しかし人々が全く郷里にしばられた生活をしていたころは、神々もその領域に限られていたが、商人たちが活躍するようになると、彼らは神々の領域である郷里からはなれることが多く、彼らはしばしば自らの郷里の神の信仰を他郷へもちこんだ。更に神々の管轄領域という考えの崩壊に拍車をかけたのは金の侵入によって南遷した人が多かったことで、開封の人々は皮場大王や二郎神の信仰を臨安にもちこんだ。

そして人々の間にも郷里の範圍を越えて生活を營んでゐるのに、なぜ神々の領域がそれより小さくなければいけないのかという主張もあらわれた。著者によれば、ここには郷里に限定されたものを超えた、近くの郷村ひいてはその神々との絆を認める意識がみられるが、それは地方神の信仰へ向かう一ステップだとしている。

つづく「地方神の信仰」ではここでとりあげる四人の神々の一つ〇〇、一一五〇、一二〇〇、一二五〇年における廟の分布を、江南の東海岸地方の地圖上に示し、それらの廟が大運河、海岸など主要な水上交通路にそつて廣がつてきており、内陸のものもそれらに通ずる河川上に分布していることを示す。そして四人の神々を簡単に紹介して個々の信仰の考察に移る。李順の亂を平定するのに功があつて王號を與えられ、主として四川の士大夫によつて廣まり、科擧の神としての地位を確立した梓潼帝君の場合を除き、他の三神はいずれも主として商人たちによつて信仰が支援され、大運河等の水上交通路にそつて行宮が廣まつていった。その信仰の擴大過程が比較的詳しく分析されているのは張王の場合である。張王は自らが稱號を受けるばかりでなく、多くの家族まで稱號を受け、著者の得られた資料によれば四二箇所という最も多い行宮をもち、商人ばかりでなくあらゆる社會階層の人たちから幅廣い信仰を集めた。著者は張王の信仰の廣まりを spider plant にたとえ、張王が郷里の神とともに併祀されることが多かったばかりでなく、それらの神とより制度化された關係を保つたことがこの信仰の成功の一因であつたとする。著者の擧げてゐる例はいずれも湖州にある李侯、方使者という神の例で、もともと張王とは無關係であつたものが、方使者の場合は張王の家族とみなされるようになり、李侯の場合にはその家族の

信仰がまたそこから派生している。

このような信仰に對しては地方官も支持を與え、地元の有力者たちとともに稱號の獲得や廟の重建などに協力したことは前章にもあつた通りである。彼らは、神がその領域を越えて信仰されることに對しては、孟子や詩經の文を引いて根據を與えたりした。またあらゆる種類の民間神の信仰を承認した劉克莊の論もここに紹介されている。これに對し、黃震の批判にみられるように、このような民間神の信仰の無原則な擴大、祭りの際の熱狂と浪費、本來皇帝にのみ許される供犠という特權の侵害などは、一部の士大夫たちには秩序への脅威として非難の對象となつた。そして一三世紀後半になると朱子學と結び附いた統制と彈壓の態度への傾向が強まつたが、彼らの批判にもかかわらず、これらの信仰の擴大と熱狂をおしとどめることはできなかつたと結んでゐる。

著者が前章でも觸れてゐたように、これらの新興の神々が、その發生の地とは無關係の地にまでその信仰圈を擴大し、行宮が各地に建てられるようになるにあつて、商人が果たした役割の重要性の指摘は、この時代の宗教史上の變化を考える上で非常に重要な點である。しかしそれだけでは祠山廟の牛祭や陳淳が非難した漳州の祭りのあの熱狂、各地における祠廟の簇生といった事實の一面しか説明できないこともまた確かである。商人が廣めてゐたものであつても、各地でそれだけの信仰を集め得たものにはいろいろう事情があつたのか、はたして古代からの春社、秋社の祭りの熱狂をうけつぐ新しい年々の祭祀が、これらの祠廟をめぐつて行われるようになったという變化があつたのか、それはまた別に説明されるべきであらう。

第一章の初めに述べられているように、著者は唐宋の變革期における宗教界の變化のうち最も重要なものとして、民間のパンテオンの形成をあげ、それにまつわる様々な面をこの著作の中でとりあげ分析を與えている。儒、佛、道という異なった傳統の出自に無關係な、また新興の低い階層出身の神々を含めた神々の信仰、それらに對する國家の賜額賜號と、そのことをめぐる地方官と地元のエリート政治的な協力關係、もともとと管轄領域を越えた地方神の信仰の誕生とその信仰の擴大にはたした商人層の役割、あるいは地元のエリート層の役割などである。第七章「結論」において著者は冒頭にあらためて「民間宗教の變化はこの時代の變革の解明にいかなる光を投げかけるか」という問題を提示する。そして「民間宗教の社會的背景についての情報は、この間にいくつかの解答を提供し、パンテオンにおける變化はその他の解答を提供する」として、以上のような點を整理し總合した形で提示している。

現在、中國の宗教に對する關心は高まってきた。そして以前と異なっているのは、たとえば以前の中國佛教の研究のように、日本に大きな影響をもたらしたものとして、佛教教理の中國における發展を研究するというようなものでなく、あくまで中國人の生きた信仰としての佛教・道教あるいは民間信仰が、その對象となつてゐる點である。その關心は人類學から歴史學、文學、思想など多方面からよせられており、總合的に中國人の宗教をとらえようとする傾向が強い。そのような點からも、特に民間信仰、儒、佛、道などが渾然となつた民間宗教といわれる部分の解明は重要性をもつてゐる。

宋代特に著者が取り上げている南宋の時代は、舊中國の宗教を特徴づけているような事象が多く現れてきている點で、注目すべき時代であるが、著者のように總合的な視點を提示しつつ分析をすすめたものは、今までには見られなかったといつてよい。その點で今後の研究をすすめる上において大きな基礎を提供したものであることは間違いない。ここで著者が宗教界の變化を提示するばかりでなく、その社會的背景について、商人層や地元のエリート層の動きにからめて分析している點は極めて興味深く、この點がこの著作を興行きの深いものにしている。しかし一つ不満が残るのは、宗教界の變化自體、即ち著者のいうパンテオンの形成という動き、低い階層出身の神々の信仰の誕生、地方神の信仰の熱狂というような事象自體を、中國宗教史全體の流れの中でどう位置づけるかという觀點が比較的希薄である點である。

たとえば新興の神々が生れたということにしても、もしそれだけなら『搜神記』等に見られる蔣子文の信仰など、流行神的神々々は存在した。問題はそれらの神々が、様々な傳統を背景とする神々と同一のパンテオンの中に組み込まれたということとを、どのようにとらえるべきなのかということであろう。民間の神々の信仰の活力が無視できないようになり、傳統的な信仰にそれらをも含めた、新たな秩序を形成することが求められたということなのか。あるいは鄉村の結びつきの變化にともない、社稷の信仰に代表されるような古い信仰に、それらが取って替わるという事態が廣くみられたのか。古い信仰を含めて全國的に民間の祠廟を中心とする信仰の形態に變化が生じたのか。あるいはそのような現象は、新たに開拓された地域もしくは都市部に特有なものであつたのか等々である。

しかしこのようなことは著者が真に明らかにしたかった問題とは別のものであろう。紹介においても著者の意圖するところを充分に汲み得たかどうか、はなはだ不安であるが、著者のこのテーマで次の論考を待ちつつ筆をおかせていただきたいと思う。

Princeton, New Jersey: Princeton University Press,
1991, 24cm, xii+256 pp.